

いじめによる自殺について — ありのままの自分で居られる居場所を作るために —

08K045 柴野 和記

1. はじめに — いじめとは

2006年に「いじめ」はマスコミに大きく取り上げられ、今や社会的な問題へと発展している。「いじめ」とは、いじめる側・いじめられる側・いじめを傍観する側の三者の『ありのままの自分で居られる居場所』が喪失した状態の事を指す。この『ありのままの自分で居られる場所』とは、三者が相互に個性を認め合い、対等な友好関係の中で、自由かつ純朴に自己表現ができ、安心感や幸福感を得られる場所の事を指す。いじめはそれ自体も非常に問題であるが、そこから派生する登校拒否や非行などの問題は極めて深刻である。その中でも特に問題なのが自殺である。このいじめによる自殺は、現在若年自殺全体の一割強にも達している。¹ いじめによる自殺を食い止める為には、いじめ構造の世界の外に、家族や友人と過ごせるような配慮を周囲が行い、いじめを受けた子供達がありのままの自分で居られる居場所を確保することが必要である。

2. いじめが起きる要因

いじめが起きる要因は、子供自身の要因・学校の要因・家庭の要因・社会の要因の4つに分けられる。この章ではこの要因について、順を追って説明しようと思う。

1) 子供自身の要因

まず、この節では子供自身の要因を、いじめる側・いじめられる側・いじめを傍観する側の3タイプに分けて述べて行きたいと思う。

① いじめる側の子供の要因

i) 自己中心的思考

まず、いじめる側の子供の要因として、「自己中心的思考」が挙げられる。この場合の「自己中心的思考」とは、自分だけ良ければそれで良いという考え方を指すと同時に、自分の思考や行動は正しく、相手の思考や行動は間違いであるという非合理的な考え方を意味する。² そして、いじめる側の子供は、この考え方に基づき、いじめを行っている自分を正当化しようとしているのではないかと考えられる。また、この「自己中心的思考」に陥るあまり、相手への思いやりの気持ちを喪失し、相手の存在や人格を否定する行為に走ってしまうのではないかと考えられる。

ii) 欲求不満

次に、いじめる側の子供の要因として、「欲求不満」が挙げられる。この場合の「欲求不満」とは、周囲が持っている物を自分が持っていない・自分より相手の方が学力や運動能力が勝っている・相手の方

が自分より経済的に恵まれている場合などに生まれる過度なストレスのことを指す。³ そして、いじめる側の子供たちは、この膨れ上がったストレスを発散する為の捌け口として、クラスで弱い立場の子や目立った立場の子へのいじめへと走ってしまうのである。

iii) 耐性の欠如

最後に、いじめる側の子供の要因として、最も重要な要因と考えられるのが「耐性の欠如」である。この場合の「耐性の欠如」とは、相手の嫌な部分に嫌気がさし、我慢ができない状態を意味する。そして、いじめる側の子供は、この我慢の状態を突破すると、相手を攻撃しないではいられなくなるのである。⁴ なぜなら、著者自身の経験やいじめに関する様々な研究所から鑑みると、いじめる側の子供の心には、嫌な奴（目の前の嫌な現実）をすぐにでも消し去りたいという気持ちが働くからである。このように、いじめる側の子供の「耐性の欠如」が、いじめを引き起こす一番の要因になっていると言える。

iv) まとめ

ここまで、いじめる側の子供の要因を述べてきたが、いじめる側の子供だけが必ずしも悪いと一概には言えないと言わなければならない。なぜなら、いじめる側の人間も、様々な悩みを抱えた一人の子供であり、その悩みを吐き出す場所を見出せなくて、いじめに走ってしまっているからである。また、いじめる側の子供もいじめられる側の子供と同じように、いじめを行う度に、自分の心を無意識の中に傷付けてしまっているからである。だからこそ、周囲の人間が、いじめる側の子供たちが溜め込んでいた悩みを、気楽に吐き出せる『居場所』を、協力して作り上げなければならない。だからといって、いじめは肯定されるべきではない。しかし、いじめはいじめる側の子供だけが悪いのではなく、様々な要因が複雑に絡み合って発生している事を忘れてはならない。

② いじめられる側の子供の要因

i) 耐性の欠如

まず、いじめられる側の子供の要因として、「耐性の欠如」が挙げられる。この場合の「耐性の欠如」とは、目の前の辛い現実に我慢できず、逃げ出したい心を指し、①の並）のいじめる側の子供の「耐性の欠如」とは異なる。⁵ いじめられる側の子供たちは、日夜この気持ちに苛まれた結果、この「耐性の欠如」によって登校拒否や自殺に走ってしまうのである。また、この気持ちを周囲に悟られない為に、いじめの事実の隠蔽を行おうとするのである。

ii) 対人困難性

さらに、いじめられる側の子供の要因として、最も重要な要因と考えられるのが「対人困難性」である。この「対人困難性」とは、人とどのように親しく接したら良いか分からず、人と上手く関係性を築けないという事を指し、最近の子供たちに良く見られる傾向がある。なぜなら、最近の子供たちは、物心がついた時には携帯ゲームやパソコンといった道具があり、生身の人間ではなく、機械との親和性の方が高いからである。ゲームやパソコンといった機械は、生身の人間とは違い、自分の思い通りに反応してくれるから、付き合うのには非常に楽な相手と言える。しかし、生身の人間は何をするか予測がつかない上に、相互の意見が食い違い衝突するなど、付き合う上で不都合な事が多いので、子供たちにとっては怖い存在でしかない。⁶ そして、このような人に対する恐怖心から、人と上手く関係性を築く事ができず、いじめを受けている事実を誰にも相談できないという状態を、自ら生み出てしまっていると言え

る。また、このような状態を維持し続ける事によって、人間不信に陥ってしまっているとも考えられる。

iii) まとめ

ここまで、いじめられる側の子供の要因を述べてきたが、いじめられる側の子供たちは、些細な一言でも自殺による死を選択せざる状況下に置かれているという事を述べておかなければならぬ。この事について、弁護士の平尾潔は、「いじめで自殺を選択する人は、コップの水が溢れるように死を選ぶ」と述べている。「いじめられる側の子供たちのコップには、嫌な事をされる度に水が貯まっていく。初めの内は大丈夫でも、段々と水が貯まり、コップ並々一杯になった時に、コップの水を溢れさせる為に必要な水の量は一滴で良い。例えば、ウザい・キモイ・死ね・あっちに行けなどといった些細な一言が、最後の一滴になる事があるかもしれない」と指摘している。⁷ このように、いじめられる側の子供の心のコップには、常に水が貯まり続け、それが極限状態に達した段階で、いじめる側の子供が意図せず発した一言により、死を選択しかねないという事を肝に銘じておかなければならぬ。

③ いじめを傍観する側の子供の要因

i) 対人困難性

まず、いじめを傍観する側の子供の要因として、「対人困難性」が挙げられる。この場合の「対人困難性」とは、自分の所属するグループ外の人間との接し方が分からず、その相手とある程度の距離関係を保った人間関係を築こうとする場合の事を指し、②のii) のいじめられる側の子供の「対人困難性」とは異なる。⁸ この「対人困難性」により、いじめを傍観する側の子供は、あまり親しくないという理由で、いじめられる側の子供に積極的に関わろうとしないという事が言える。また、相互に一定の距離を保った人間関係が構築されている為、安心や幸福を得られる『居場所』の形成を困難にしていると言える。

ii) 自己中心性

さらに、いじめを傍観する子供の要因として、最も重要な要因と考えられるのが「自己中心性」である。この「自己中心性」とは、自分にいじめの被害が及ばなければ、他人がいじめられていようと関係ないという考え方を意味する。⁹ この「自己中心性」により、周囲の人間は、「自分がいじめられるかもしれない」という恐怖感に苛まれ、傍観者の立場を取らざるを得ないと言える。また、この「自己中心性」の考え方方が、手を差し伸べたくても差し伸べられない状況を生んでいる。これもまた、傍観者となっている子供たちの本心を表現する機会を奪い、相互の個性を認め合う『居場所』の形成に歯止めを掛けていると言える。

iii) まとめ

ここまで、いじめを傍観する子供の要因を述べてきたが、このいじめを傍観する子供たちの働きが、いじめを解決する上で、最も重要な鍵を握るという事を述べなければならない。なぜなら、この子供たちこそ、いじめられている子供たちの『ありのままの自分で居られる居場所』と成り得る存在だからである。そして、彼らがいじめられている子供たちの『居場所』となり、個性を尊重し合い、相互に対等な立場の信頼関係が築かれる事によって、いじめを傍観する子供たちの『ありのままの自分で居られる居場所』も同時に形成されるのである。だからこそ、いじめを傍観する側の子供たちは、「自分がいじめられるかもしれない」という恐怖心に打ち勝ち、「いじめは悪い。だから、辞めさせなければならない」という覚悟を持ち、いじめられている子供たちの『居場所』になってあげようと努力する姿勢が必要である。

2) 学校の要因

i) 教師の配慮不足

まず、学校の要因として、「教師の配慮不足」が挙げられる。この「配慮不足」とは、いじめが起きているという事実を、責任回避の為に、知っていても知らない振りをしているという訳ではなく、教師が少しふざけているなとかザワザワしているなというくらいの捉え方をして、生きるか死ぬかの深刻な事態に陥っているとは考えていない状況を指し、子供達の普段の行動や様子に対する配慮や注意が、日常的に行き届いていないという事を意味する。¹⁰ このような教師の配慮不足が原因となり、いじめに対する対応が遅れ、結果的にいじめによる自殺を招いてしまっていると考えられる。

ii) 初期対応の不適切さ

i) の教師の配慮不足に関連して、「初期対応の不適切さ」が挙げられる。この「初期対応の不適切さ」とは、いじめの初期段階で対応する事が出来ず、いじめられる側の子供の『居場所』が喪失し、いじめがエスカレートしてしまう現象を意味する。このようにいじめの初期段階で対応が出来ない事により、いじめを発見した際には、学校として対応が取れないくらい、いじめが深刻化しており、いじめられる側の『居場所』の復元が不可能な状況が生まれてしまうのである。

iii) 技術教育の偏重と知育教育の軽視

最後に、学校の要因として、最も重要な要因と考えられるのが「技術教育の偏重と知育教育の軽視」である。なぜなら、現代の学校教育は、知育教育よりも技術教育や受験教育に重点が置かれ、『人を人にする教育』の欠如の結果、学校教育本来の機能が低下して来ているからである。¹¹ そして、この学校教育機能の低下が、これまで見て来た「いじめる側」・「いじめられる側」・「いじめを傍観する側」の三者の『居場所』の形成力の欠如の原因となっている。その結果、いじめが発生した際に、それを解決する力もなく、方策も取れないと考えられる。だからこそ、三者が『居場所』を形成できるように、学校側が三者の形成力の向上に努める必要がある。そのために、「自律の精神」や「個性を尊重する心」などといった『豊かな人間性』が育まれる教育を行うべきである。

iv) まとめ

ここまで、学校の要因を述べてきたが、いじめを解決するに当たり、学校が果たさなければならない役割は極めて大きいという事を述べておかなければならない。なぜなら、いじめが発生するのは学校であり、それを解決に向けて導くのは、学校で働く教職員の使命であるからである。それでは、具体的にどのような対策を取れば良いのだろうか。

まず、普段から生徒と積極的にコミュニケーションを図り、生徒の日常の様子や行動に細心の注意を払い、何か問題が発生した場合は、迅速に対応する事が必要である。また、いじめなどの大きな問題が発生した場合を念頭に置き、常に学校全体で動けるように教職員の間で強固なパイプラインを形成しておく必要がある。

次に、技術教育や受験教育に重点を置いた教育ではなく、『人を人にする教育』に重点を置いた知育教育を行い、先述した『豊かな人間性』を育む必要がある。

最後に、学校全体で、上の2つの事を駆使し、生徒一人一人が個性を發揮できる『居場所』としての学校作りを、率先して行うべきである。

3) 家庭の要因

i) 教育力の欠如

まず、家庭の要因として、「教育力の欠如」が挙げられる。この「教育力の欠如」とは、家庭が人間としての成熟を促すような機能を果たしていない事を意味する。家庭とは本来、生きる目標や人に対するいたわり、社会に対する貢献などといったものを、家族の絆の中で自然にはぐくむべき場所である。しかし、現在多くの家庭では、その力が衰退してしまっているように見受けられる。そして、その結果、子供が思春期を迎え、情緒不安定になったり、批判精神が旺盛になったりすると、親子間のコミュニケーションが上手く取れず、いじめなどの問題を発見するのが遅れてしまうのである。¹²

ii) 問題解決力の欠如

次に、先述した「教育力の欠如」に関連して「問題解決能力の欠如」が挙げられる。この「問題解決能力の欠如」とは、家庭や地域の力だけで解決可能な問題さえも、すぐに専門家に相談し、処理を試みようとする事を指す。本来であれば、家庭や地域で解決できない問題を、専門機関にカバーして貰うのが一般的であり、まずは、子供にとって最も身近な社会である家庭や地域の努力が優先されるべきである。そうしなければ、本来の『居場所』は取り戻されない。しかし、現在はその順序が逆転し、専門家の介入によって、親や地域の結束が困難となる悪影響が引き起こされている。¹³ そのため、いじめなどの問題が起きた場合、それを解決する為に、親や地域が結束して取り組む事を困難にしていると考えられる。そして、家庭や地域の「問題解決能力の欠如」は、いじめに関わる子供たちの『居場所』の復元にとって、重大な障壁となっているのである。

iii) まとめ

ここまで、家庭の要因を述べてきたが、いじめを解決するに当たり、学校と同じくらい家庭や地域の役割が重要である事を述べなければならない。なぜなら、『ありのままの自分で居られる居場所』を形成する為には、家庭や地域が学校と協力する事が必要不可欠だからである。それでは、具体的にどのような行動をしたら良いのだろうか。

まず、日頃から積極的に親子のコミュニケーションを取る時間を確保し、学校生活での不安や悩みなどを聞き、子供のストレスを緩和してあげる事が必要である。また、学校教育ではカバー仕切れない「人徳教育」を行う必要がある。この事について、NPO法人ジェントルハートプロジェクトの理事を務める小森美登里は、「人と人が繋がる時、何にも代えがたく大切な物である、ジェントルハート（優しい心）を、家庭で育もうとする事が大切である」と指摘している。¹⁴

次に、実際にいじめなどの問題が起きた場合に、すぐに協力体制が敷けるように、日頃から専門家に 急に頼らない親同士のネットワークや地域のネットワークを整えておく事が必要である。

最後に、家庭や地域が一丸となり、学校と協力する事により、本来の自分を取り戻せる『居場所』を形成し、いじめ撲滅に向けて努力する事が重要である。

4) 社会の要因

i) 情報過多の時代的影響

まず、社会の要因として、「情報過多の時代的影響」が挙げられる。特に、テレビや新聞といったマスコミは刺激的でセンセーショナルな情報を流している。中でも、いじめ問題の情報は積極的に流しており、今まで全くいじめの問題が起きていなかったような地域でも、いじめが多発するという現象を引き起こし

ている。¹⁵ マスコミの影響は都市部だけではなく、あらゆる地域の子供にいじめを助長していると言つても過言ではない。また、マスコミが積極的にいじめに関する情報を流す事により、かつての残虐ないじめを模倣するというケースも増えている。その具体例として、2009年11月17日に、沖縄県うるま市の中学2年生の米盛星斗君が、同級生8人に集団暴行を受け、殺害された事件が挙げられる。この際、マスコミは、加害者の生徒が集団暴行を隠蔽する為に、「プレハブ小屋から落ちた」という嘘の証言をした事や、被害者の血の付いた制服を着せ替えた事を公表し、いじめの隠蔽の仕方を助長するような報道を行つた。だからこそ、マスコミには、いじめを助長するような扇動的な報道の自粛や自制を切に望むところだ。

ii) 一人遊び器具の氾濫

次に、社会の要因として、携帯電話やPC、専用機によるゲームを初めとした「一人遊び器具の氾濫」が挙げられる。なぜなら、現代企業は、子供が一人で遊べる機械や道具を大量販売し、子供から人と接触する時間を奪っているからである。¹⁶ これらの器具は、人間の成長に悪影響を及ぼすものや、孤独な人間形成を助長するものが多く、本来、人とのコミュニケーションによって形成されるべき『居場所』を、孤独なものに変質させてしまうものであると言える。また、格闘ゲームや殺戮ゲームなどで、暴力シーンや殺戮シーンに接触する時間が長ければ長いほど、脱感作効果が生じやすくなり、暴力や人の死に対して刺激や感覚が鈍化し、犯罪や暴行に手を染めてしまうケースが多くなるという調査結果も出ている。だからこそ、子供たちは、一人遊び器具に夢中になるのではなく、人と積極的に関わる時間を増やし、豊かな人間関係の形成に努めるべきである。

iii) まとめ

ここまで、社会の要因を述べてきたが、特にテレビや新聞といったマスコミやテレビゲームなどは、いじめを促進させる作用を持っている事を述べなければならない。なぜなら、テレビやマスコミで報道されたいじめの情報を模倣したいじめが、頻繁に発生しているからである。だからこそ、マスコミはいじめを助長するような扇動的な報道を避けると共に、いじめの発生を防止するような報道の仕方を模索するべきである。また、格闘ゲームや殺戮ゲームなど、明らかにいじめを助長すると考えられるテレビゲームは、年齢制限を加えるなど、適切な措置を施すべきである。

3. いじめの特徴と実態

1) かつてのいじめの特徴

かつてのいじめの特徴として、男子はパシリ・恐喝・殴る・蹴るなどの暴力で、女子は物を隠す・いたずら電話などが挙げられる。そして、最も特徴的なのが現在のいじめとは違い、死まで追い詰めるようないじめがなかったということだ。¹⁷ この背景には、いじめを抑制する学校の教育力があったことや、時代の風潮、マスコミの影響力の低さがあると考えられる。

特にマスコミの影響力の低さは、前の章の4節の話から伺えるように、死まで至らしめるいじめが起きた事実に大きな影響力を及ぼしていると考えられる。

2) 進化したいじめ

いじめは時代と共に進化し、相手を死まで追い詰めるものとなつた。最近のいじめで、特に顕著なのが「メールによるいじめ」である。メールは不思議な魔力を持ち、口では言えない事が簡単に言える。また、

時と場所を選ばないので、いつでもどこからでも送れるというメリットもある。この双方が引き金となり、仮想空間でのいじめが簡単に引き起こされてしまう。さらに、この仮想空間は、いじめる側の子供にとって、顔が見えないという利点を生み、言葉の暴力性を増幅させる効果を与える。一方、いじめられる側の子供は、顔が見えない相手からの言葉の暴力により、恐怖感と孤独感が増し、仮想上で味方が居ない状況を、現実でも味方が居ないものと錯覚してしまうのである。最近の子供は知り合うとすぐにメールアドレスを交換し、ブログやホームページを作り、友人と教え合う。仲が良い内は良いが、そうでなくなるとすぐにメールでの攻撃が始まる。そして、1人からの攻撃は次第に拡大し、1対多数へのいじめへと姿を変え、いじめられる側の子供の『居場所』は喪失し、心のコップの水は溢れ、死へと向かってしまうのである。また、男子はズボン降ろし、女子はスカート降ろしや茶巾絞りなど、相手に最大限の辱めを受けさせる容赦のないいじめが増えている。中には、トイレで大便をさせたり、裸にして写メールを撮ったり、地面に埋めたりなど、犯罪と変わらないケースも増えている。¹⁸ このように、現在のいじめはいじめられた側にとって、救いも抜け道も何もないのが現状であり、蛇に睨まれた蛙のように死へと追い込まれるしかないのである。

3) 外国でのいじめ

ここで外国でのいじめについて、少し触れてみたいと思う。アメリカの心理学博士のドロシー・エスペラージュは、アメリカにもいじめは昔から沢山あるが、現在の日本のように社会化するような事態は全くないと述べている。しかし、いじめの発生件数の比率を比較してみると、アメリカの方が圧倒的に多いという。なぜなら、アメリカという国は勇気と力を重んずる国柄であるため、親も教員もいじめは当たり前の事だと認識し、余程の事がなければ干渉しないためである。また、ヨーロッパでも同じようにいじめは無数にあるが、日本で起こっているように、自殺を引き起こすような深刻なものはないという。

次に、いじめから派生する問題について見ると、登校拒否はアメリカやヨーロッパにも見られるが、日本の規模の大きさと比較すると、極小規模なものであり、日本の解決能力の低さが窺える。また、アメリカやヨーロッパには、家庭内暴力というものはなく、この問題は日本特有の問題である。このようにいじめから派生する問題の視点から見ても、日本のいじめがどれだけ独特で、卑劣なものかということが見て取れる。¹⁹

4. いじめをなくすために — 具体的な解決策の提示 —

1) 日本の防止策とアメリカの防止策の相違点

現在の日本は、学級担任やスクールカウンセラーと呼ばれる相談員にいじめの防止や解決を一任している。しかし、アメリカの心理学博士のドロシー・エスペラージュは、「学級担任やスクールカウンセラーは、この対策の為の専門の教育を受けていないため、彼らに一任するのではなく、ソーシャル・ワーカーのようなメンタルヘルスの専門家を訓練して配属するべきだ。」と指摘する。なぜなら、アメリカでは、学校・放課後の児童生徒向けプログラム・宗教団体・ガールスカウト・ボーイスカウトなど、あらゆる場でいじめ防止に努める事を提唱しているのだ。また、ネットいじめについて、アメリカは、登校時に携帯を学校に預けさせたり、学校の一部を電話が通じないようにしたり、学校でのパソコン使用を監視したりといった対策を既に打ち出している。この点においても、エスペラージュは、「日本でもこういった対策を早急に打つべきである。」と述べている。²⁰ このように、日本はアメリカとは違い、いじめを未然に防ぐ手立ても、起きてからの対応の準備も完全に整っていない事は一目瞭然である。

2) いじめをなくすために重要なこと

これまで見てきた通り、いじめをなくすには、まず社会や学校・家庭といった周囲の環境を変えて行く必要がある。精神科医の樺沢紫苑は、「いじめが起きた時に、助ける人も居ないし、相談する人も居ない。この孤立するしかないという現象がいじめを引き起こす。だからこそ、いじめを受けた時に孤立しないよう、すぐに援助の手が差し伸べられ、当事者が相談しやすい環境が必要である」と述べている。²¹ 上述の通り、アメリカではいじめを未然に防ぐ手立てや、いじめが起きた時に迅速な対応が可能となるよう、周囲の環境を整えて来た。いじめが社会問題化している今、日本もアメリカを見習い、樺沢の提言している環境を作るという発想を持つべきである。具体的には、学校や家庭のコミュニケーションを大切に考え、活性化する事が重要である。これは一朝一夕に出来るものではないため、普段から子供と周囲の人々が、相互に話し掛けやすい雰囲気を作り、強い信頼関係を築いておく事が必要である。こうして、いじめに対する逃げ道を作り、いじめ構造の世界の外に『ありのままの自分で居られる居場所』を確保してあげるのである。

5. おわりに — いじめによる自殺をなくすための課題と問題点 —

このように、いじめをなくす為には、いじめる側・いじめられる側・いじめを傍観する側の三者の『ありのままの自分で居られる居場所』が確保される事が重要である。しかし、実際は、いじめる側の子供たちが自分の『居場所』を周囲の社会に見出す事ができず、1対多数によるいじめによって、いじめられる側の子供たちの『居場所』を破壊し、いじめを傍観する子供たちの『居場所』の形成に歯止めを掛けているのが現状である。だからこそ、いじめを傍観する子供たちが勇気を振り絞り、いじめられる側の子供たちに手を差し伸べる事によって、彼らが個性を惜しみなく発揮し、安心感や幸福感で満たされる『居場所』を形成しなければならない。また、相互の個性が尊重され、対等な友好関係によって結ばれる『居場所』も同時に築き上げなければならない。そして、二者が協力して、いじめる側の子供たちの個性を受け入れ、自由に自己表現できる『居場所』を構築する事によって、三者の『ありのままの自分で居られる居場所』が確保され、いじめを撲滅する事が可能になるのではないのだろうか。

また、いじめをなくす為には周囲の最大限の努力も必要である。しかし、実際には本人がいじめを告白出来ず、周囲の救いの手が全くないというのが現状である。だからこそ、いじめの事実を告白しやすい環境を、周囲の力で普段から作り上げておかなくてはならない。そのためには、まず、学校・家庭・地域・による問題意識と問題解決能力の形成が不可欠である。場合によっては、学校や家庭でのコミュニケーションだけではなく、正しい訓練を受けたソーシャル・ワーカーなどの専門家との連携を取る事も必要である。また、携帯電話を登校時に回収したり、学校でのパソコン使用を監視するなどの対策を行い、いじめが起きにくい環境を作る努力も必要である。このような環境は、日々の積み重ねによってしか作り得ない。だからこそ、普段から家族や友人と過ごす居場所を作る努力を行い、強い信頼関係を築いておく事が必要である。そして、いじめを受けた本人が自己表現でき、生きる喜びや楽しさを感じられる、『ありのままの自分で居られる居場所』が、いじめによる自殺をなくしてくれるであろう。

参考文献

- 稻村博著『いじめ問題—日本独特の背景とその対策—』、教育出版、1986年。
- 佐山透著『いじめをやめさせる！—現役教師が本音で語る、現実的対処法—』、草思社、2007年。
- ドロシー・エスペラージュ著「いじめの現状とその解決策」
『在日米国大使館ホームページ』(2008年2月22日)
(<http://tokyo.usembassy.gov/j/p/tpj-20080416-71.html>) (2008年6月17日取得)
- 権沢紫苑(佐々木信幸)著「いじめ自殺 権沢の証言」『いじめ自殺を防ぐ「いじめをなくす」ことより重要なこと』
(<http://www.ijime.bizshin.com/teigen/index5.html>) (2008年6月17日取得)
- 山口一男著「暮らし・いじめ対策、いま何をするべきか」『JanJanニュース』(2006年10月25日)
(<http://www.news.janjan.jp/living/0610/0610243314/1.php>) (2008年6月17日取得)
- 平尾潔著『いじめでだれかが死ぬ前に—弁護士のいじめ予防授業—』、岩崎書店、2009年。
- 小森美登里著『いじめの中で生きるあなたへ・大人から伝えたい「ごめんね」のメッセージ』、WAVE出版、2007年。

脚注

- 1 稲村博著『いじめ問題—日本独特の背景とその対策—』、教育出版、1986年、まえがき。
- 2 同書、42~43頁。
- 3 同書、39~42頁。
- 4 同書、38頁。
- 5 同書、38頁。
- 6 同書、34~37頁。
- 7 平尾潔著『いじめでだれかが死ぬ前に—弁護士のいじめ予防授業—』、岩崎書店、2009年、78頁。
- 8 稲村 前掲書、34~37頁。
- 9 同書、42~43頁。
- 10 同書、46頁。
- 11 同書、50~51頁。
- 12 同書、52~53頁。
- 13 同書、53~54頁。
- 14 小森美登里著『いじめの中で生きるあなたへ・大人から伝えたい「ごめんね」のメッセージ』、WAVE出版、2007年、95頁。
- 15 「例えば、関東から少し離れた山間部の小・中学校があげられる。」稻村 前掲書、62頁。
- 16 同書、63~64頁。
- 17 佐山透著『いじめをやめさせる！—現役教師が本音で語る、現実的対処法—』、草思社、2007年、61頁。
- 18 同書、61~63頁。
- 19 稲村 前掲書、29頁。
- 20 ドロシー・エスペラージュ著「いじめの現状とその解決策」
『在日米国大使館ホームページ』(2008年2月22日)
(<http://tokyo.usembassy.gov/j/p/tpj-20080416-71.html>)
- 21 権沢紫苑(佐々木信幸)著「いじめ自殺 権沢の証言」『いじめ自殺を防ぐ「いじめをなくす」ことより重要なこと』
(<http://www.ijime.bizshin.com/teigen/index5.html>)

(レポート担当教員 山崎由紀)